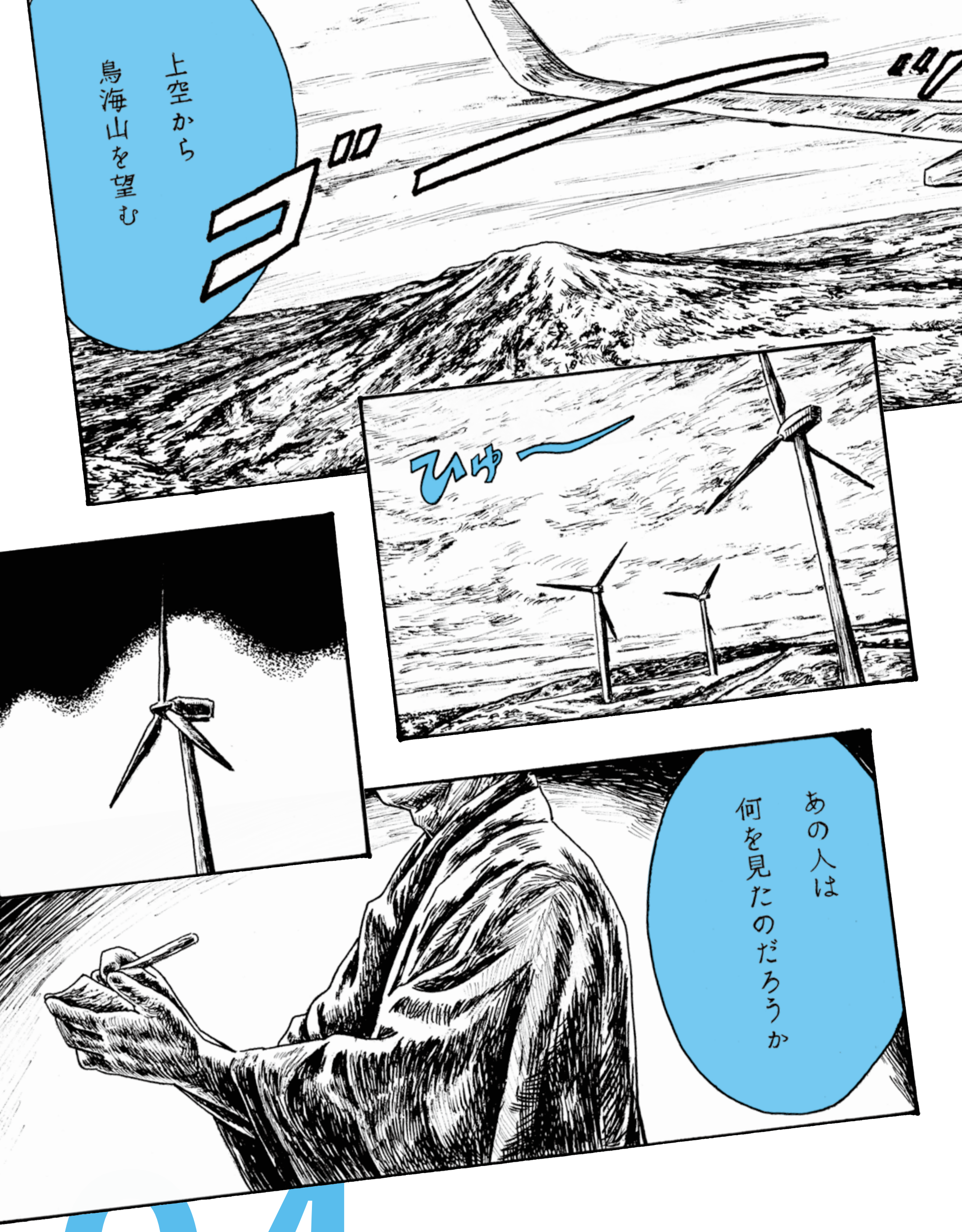


04

「ジオカルチャー研究プロジェクト」は2021年にリサーチを開始して以来、地学的・生態学的・人類学的な複数の絡まり合った事象や文化、そのダイナミックで混種的な複数性の共存に対し、ジオス（地球）を基盤とする文化現象として名付けた「ジオカルチャー」の概念によって迫ってきました。映像作家／研究者 萩原健一（秋田公立美術大学ビジュアルアーツ専攻准教授）の『にかほでそとね』では新しい野外活動の創出を、井上宗則（景観デザイン専攻准教授）による『流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究』では現地調査・分析によって地域を特徴づける景観要素の位置付けをおこなっています。人類学者 石倉敏明（アーツ&ルーツ専攻准教授）は、アーティストと人類学者による共異的なフィールドワークによって、新たな研究のアプローチを試みる『野生めぐり　にかほ版』を展開しています。

龍王の川と鳳凰の卵

絡まり合う二つの神話

小滝集落の金峰神社に伝わる神事芸能「小滝のチョウクライロ舞」は、境内にある二間四方ほどの土舞台（「チョウクライロ山」と呼ばれる）の上でおこなわれる。この土舞台は、古代インドの仏教神話において人間の住む世界を意味する「閻浮提（えんぶだい）」という別称を持っている。

2023年の春、コロナ禍を経て四年ぶりに本格的に復活するチョウクライロ舞を見学した。この舞楽は古代中国・北斉の羅陵王（蘭陵王）長恭が仮面をかぶって敵を欺き、見事敵を破った戦勝の舞（陵王の舞）と、それに応答する龍の舞（納曽利の舞）を主題とする。陵王と納曽利の舞は雅楽の一般的なモチーフで、日本列島の各地に波及している。金峰神社では、これが国家の安寧と衆生の長寿を願う延年の舞と習合され、優雅な祝福感溢れる「小滝のチョウクライロ舞」が生まれたのであろう。

東北古代史を専門とする歴史学者の高橋富雄は、「陵王の舞」を、かつて「竜頭山」と呼ばれた鳥海山の神が川に姿を変えて山を下り、ちょうど奈曽滝という聖地に位置する金峰神社で人界に降りるさまを表したもの、と解釈した。つまり、鳥海山そのものを体現する舞が「陵王（龍王）の舞」であり、納曽利の川である奈曽川を迎える龍の答舞が、「納曽利の舞」ということになる。すると、チョウクライロ舞は徹頭徹尾、龍王と龍をあらわす一貫した伝説に根差した舞楽である、ということになるだろう。「チョウクライロ」という不思議な名前も、古代中国の龍王である「長恭羅陵王」がこの地方の訛りで変化したものであると、高橋は考えた。

鳥海山を龍や蛇の山と考える系譜は、実際に古くから存在している。『日本三代実録』には、貞観十三年（871年）に大きな噴火が起こり、大小の蛇が溶岩とともに流れたという記録がある。いっぽう、南麓の山形県遊佐町にある丸子地区では、かつて巨大な鳳凰が降り立って三つの卵を産み落とし、そのうちの鳥海山に二つ目が月山に、三つ目が丸子親王と呼ばれるこの土地の人間の祖先になったというユニークな卵生神話が伝承されている。進藤重記『出羽国風土略記』によれば、こうして生まれた丸子親王は、最後には鳥海山の「鳥の海」に沈んでいったという。蛇と巨鳥の神話は、後に龍と鳳凰の神話に変奏され、それぞれ鳥海山の北麓と南麓に伝えられた。ここには、大地を這い、川の奔流として流れる龍の伝説と、大空から舞い降り、卵を産む鳳凰の山の伝説が、どちらも活きた神話として、それぞれの土地に伝承されてきたのだ。

秋田側の北麓に伝わる龍王伝説は、鳥海山からもたらされる奈曽川の流れと共に、かつて鳥海山で起きた火山活動を体現していた。ところが南麓の神話では、大空から舞い降りた巨大な鳳凰が卵を産み落とし、そこから山が生まれるというモチーフが優勢となっている。しかも南麓に位置する吹浦系の縁起は、天地混迷の時代に天竺と百済（インドと朝鮮半島）からやってきた両所大明神が乗っていた巨鳥の抱える二つの卵から鳥海山と月山の菩薩が生まれるという、ユーラシア大陸との強い繋がりを暗示させる壮大な神話を背景としている。

ここで重要な役割を果たすのが、鳥海山から出現したという伝承をもつ、卵を思わせる「瑠璃の玉」の存在だ。この宝物は、鳥海山にまつわる歴史において、重要な役割を果たしてきた。北麓と南麓、秋田と山形に伝わる二つの神話は、それぞれ別のものでありながら、実は龍（爬虫類）と鳳凰（鳥類）という二系統の卵生動物の伝説として絡まり合い、異なるままに共存してきた。しかもそれを具現化する宝物として「瑠璃の玉」は、いわば「共異体の神話」を物質的な次元で統合している。私たちはこの伝承を、異なる歴史・神話を異なるままに対話させる「絡まり合いの知恵」として理解することができる。二つの神話は相対する伝承として、いわば鳥海山という土地の広がりの中で絡まり合い、共異体の神話として継承されたのである。

石倉敏明　1974年東京都生まれ。1997年よりダージリン、シッキム、カトマンドゥ、東北日本各地で聖者や女神信仰、「山の神」神話調査を行う。環太平洋圏の比較神話学に基づき、論考や書籍を発表。近年は秋田を拠点に北東北の文化的ルーツに根ざした芸術表現の可能性を研究する。著書に『Lexicon 現代人類学』（奥野克巳との共著・以文社）、『野生めぐり 列島神話の源流に触れる12の旅』（田附勝との共著・淡交社、2015）、『人と動物の人類学』（共著・春風社）、『タイ・レイ・タイ・リオ紬記』（高木正勝CD附属神話集・エピファニーワークス）など。第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館展示「Cosmo-Eggs｜宇宙の卵」（2019）、『精神の〈北〉へ Vol.10: かすかな共振をとらえて」（ロヴァニエミ美術館、2019）、「表現の生態系」（アーツ前橋、2019）、「尾花賢一＋石倉敏明 多摩川ジオントグラフィー」（調布市文化会館たづくり、2024）参加。秋田公立美術大学准教授。

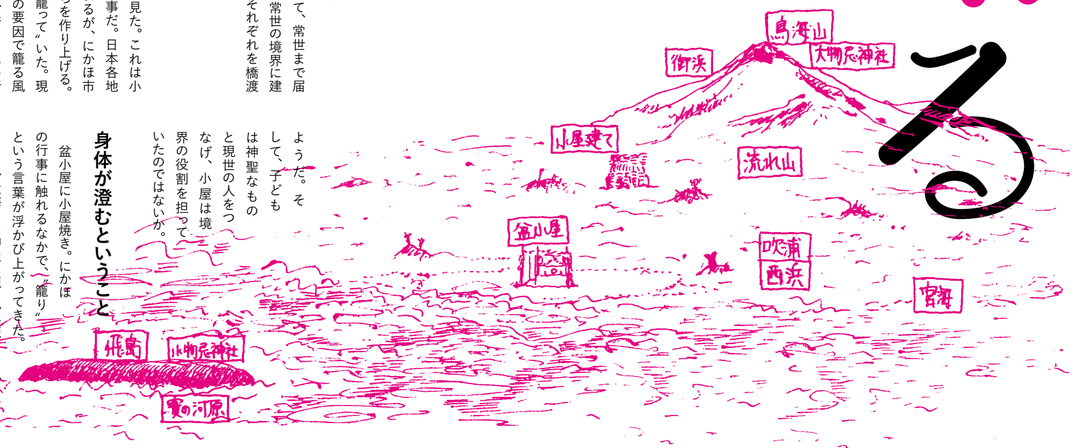
参考文献　伊藤孝博『東北ふしぎ発見　歴史・民俗のミステリーを歩く』無明舎出版、2007年。神谷滋『鳥海山縁起の世界』無明舎出版、2011年。須藤儀門『鳥海考』光出版、1989年。高橋富雄『古代語の東北学』歴史春秋社、1996年。高橋富雄『東北歴史紀行』岩波書店、1985年。

絵：尾花賢一

境界で踊る

籠りの行事と にかほの自然観

大東 忍



夏の籠り

盆小屋行事を見たのは2022年の夏だった。象潟海水浴場の浜に盆小屋は建てられる。解体の日まで4日間まいにち訪れ、小屋を建てる保存会の方に話を伺ったりした。

小屋は小中学生が協働で建て、成長した子どもたちが教える番になっていく。できた2畳ほどの盆小屋の中でひとばん〝籠る〟。通過儀礼としての役割もあったであろう盆小屋行事だが、少子化の影響で子どもが中で籠る風習はなくなった。今では保存会の大人を中心にして小屋建てをおこなっている。

お盆の始まりには盆小屋の傍で迎え火が焚かれ、住民たちは盆小屋の祭壇で拝んだり、波打ち際の砂浜に線香を建てたりして先祖を迎える。お盆の終わりには送り火を焚き、砂浜に建てた線香のそばで火を灯した提灯を揺らしながら先祖へ言葉を送る。その視線の先、海の向こうには飛島がある。祈りは飛島を越えて、常世まで届くかのようだった。小屋は現世と常世の境界に建ち、かつて籠っていた子どもは、それぞれを橋渡しする存在だったように思える。

冬の籠り

冬には小屋建てという行事を見た。これは小正月におこなわれる左義長の行事だ。日本各地さまざまな名前・形で実施されるが、にかほ市の横岡地区では藁で小屋のかたちを作り上げる。この行事でも子どもが小屋に〝籠って〟いた。現在では盆小屋同様、少子化などの要因で籠る風習はなくなり、小屋焼き、鳥追い、餅もらいの行事のみをおこなっている。

籠る風習はなくなったものの、餅もらいでは子どもたちがお餅やお菓子をもらうために餅くれ～と歌いながら家々を訪ね周る。小屋からやってくる子どもは福を運んできてくれる来訪神のようだ。そして、子どもは神聖なものと現世の人をつなげ、小屋は境界の役割を担っていたのではないか。

身体が澄むということ

盆小屋に小屋焼き。にかほの行事に触れるなかで〝籠り〟という言葉が浮かび上がってきた。さらに、大晦日に神社に籠る〝年籠り〟も、全国でもやっているところは少なくなったそうだが、にかほの横岡地区では今もおこなわれていると聞いた。またこの辺りではアマメナマハゲといった来訪神行事もおこなわれている。この来訪神も普段は山（鳥海山）に籠っているという。

日本では成長の過渡期である子どもや身分の低い人たちは、時に境界に立つ、神に近い存在だと考えられてきた。そのため盆小屋などの〝境界〟に〝籠る〟ことで〝身体が澄み〟、現世と常世を橋渡しすることができる身体に変身する。

盆踊りにみる〝籠り〟

わたしは盆踊りが好きで、しばしば参加している。作品制作においても〈実践〉として盆踊りを踊っている。そんな盆踊りの、ヤグラを中心として輪になる光景は、一時的な共同体といえる。しかしながら、盆踊りは個人的な空間でもある。というのも、輪になっているためお互いの視線が交わらない。踊り方も周りの人を一方的に見て真似をすればいいため、基本的にはコミュニケーションを要さない。足音や声で共同体全体と徐々にシンクロしながらも、ひとりであることを許される。〝ひとりに籠る〟ことができるのだ。

思えば、盆踊りを長時間、無我夢中で踊り疲弊し高揚した身体は、言語から解放され、野生の感覚を纏いながらも人の生を謳歌し、しかし同時に人ならざるものに近づく、といった感覚になる。こうして踊っていると、風景・自然と対等になれるような気がする。そして自身を取り囲む世界を直感的に捉えられる〝澄んだ身体〟によって、風景は境界として開かれ、鮮明に見えてくる。

盆小屋。地区ごとに作った小屋が浜に並ぶが、2022年はコロナ禍でひとつだった

飛島の賽の河原。丸い石が積み上がっている

小屋焼きの様子。気候変動の影響で雪はない

にかほの自然観と身体

盆小屋の背後の海の向こうに平たい島が見える。飛島だ。飛島を含む鳥海山麓の地形は、鳥海山の山体崩壊によってつくられている。7月にはこれらの地形を結びつける「鳥海山御浜出神事」という火合わせ行事がおこなわれる。鳥海山山頂、御浜、吹浦、飛島、宮海の五箇所でかがり火を焚き、火の見え方により今年の五穀豊穣を占った*1という。小屋建ての翌日、飛島を訪れると、島の南西の岸には賽の河原があることがわかった。お盆には海の向こう、賽の河原のある方から祖霊はやってくるし、来訪神が籠る鳥海山から見守ってくれている気もする。鳥海山の頂上から飛島、さらに賽の河原の彼方にある常世まで、にかほの地形は、祖霊は海の向こうにいるというのが想像ではなく確かなことだと感じさせてくれる。そして、山体崩壊によってつくられた流れ山に立つわたしもこの自然観の内側にいるんだと、目に映る風景が実感させてくれる。

描くために踊ること、籠ること

これまでわたしは、取るに足らないとされて歴史化されないような、人々の当たり前の営みについて風景から思索し、絵画などで表現してきた。実感をもって描くために、描くときは必ずその場所を繰り返し歩いている。

風景はリズムを刻んでいる。いま生きる人や自然、そして過去に生きた人々の営みも、耳や身体を澄ませば、残っている痕跡が声となり歌となり、リズムを刻んでいるのが聞こえてくる。そしてさらに歩いたり踊ったりすることで、身体は変化し、風景のリズムにノっていく。それが〈営みの痕跡〉に寄り添うということだと思う。今回描いた木炭画のタイトル《風景の拍子》は、そういった思いからつけた。

にかほでの経験は、身体を通して風景のリズムにノることができると確信させてくれた。

行事から見えてくる人のかたち

民俗行事や風習は、現代の生活様式や風景からするとリアリティが薄く、形だけ継承されているものも多い。わたしの好きな盆踊りのなかでも、祖霊の供養を目的とした盆踊りは多くない。だが、そこには〝人のかたち〟が残っていることがある。どうしようもなく手放せない性（さが）や祈りのかたちだ。そして行事は祈り、踊り、歌うことで、どうしようもなさを解体してくれることもある。

わたしが描く風景の先には人がいる。風景のなかで物語る過去の営みたちから、わたしたちの在り処・行方について考えていきたい。

《註1》遊佐鳥海観光協会　御浜出神事より引用：
https://www.yuzachokai.jp/spot/event0714/
（2024年3月8日閲覧）

大東忍　1993年愛知県生まれ。美術作家／盆踊り愛好家。2019年愛知県立芸術大学大学院美術研究科博士前期課程修了。風景から人の営みを読み取るために歩く・踊る・描く実践を重ねながら、木炭画や自身の身体を使った表現で作品制作をおこなっている。近年の活動に「VOCA展2024 現代美術の展望 ―新しい平面の作家たち」（上野の森美術館、2024）でVOCA賞受賞、個展「TOKAS-Emerging 2023『風景を踏みならす』」（トーキョーアーツアンドスペース、2023）、企画展に「なめらかでないしぐさ 現代美術 in 西尾」（康全寺、2023）など。現在、秋田公立美術大学大学院助手。

《風景の拍子》2023、木炭、麻布・パネル、1303×3880×30mm　人の毎日の営みは取るに足らないとされ、歴史化されにくい。そういった営みの痕跡が残る風景を供養するために盆踊りを踊り、描いた。
「VOCA展2024 現代美術の展望 ―新しい平面の作家たち」にてVOCA賞受賞

撮影：上野則宏

環鳥海山麓のさまざまな環境下で天体／地面／身体への観察を促し、
新しい野外活動の創出を試みるプロジェクト『にかほでそとね』。
2022年度は中島台レクリエーションの森や冬師湿原へ、
2023年度は鳥海山のリサーチや登山、渓流沿いの移動と滞在、
白雪川上流部ではルアー制作等をおこない、
アクティブな野外活動とは異なった視点でのアクティビティに価値を見出し、
新たなフィールドの創出を試みています。
それぞれの時間、それぞれの行動、滞在の様子や風景、参加者の言葉…。
『にかほでそとね』のプロジェクト動画は、映像作家・嶋津穂高氏の手によって編集され、
にかほ市と秋田公立美術大学のYouTubeで公開中です。

堀江侑加　神奈川県出身。「自称エンターテイナー絵描き」を目指している。
得意分野は漫画、イラスト、デッサン、水彩画、アニメーション、映像、作曲など。主な活動に漫画、挿絵、似顔絵、小道具、映像作品の制作。
映画「光を追いかけて」劇中作画・手元吹替担当など。

ほりえってぃ 作品サイト
ほりえってぃ X

《Knolling in the fields 2022 Autumn》
中島台レクリエーションの森や
象潟海岸で過ごした2022年度の記録を
YouTubeで公開中！

撮影・編集：嶋津穂高

《Nikaho × Akibi Winter》
流れ山とハンノキが作り出す
冬の冬師湿原でおこなった
雪上フィールドワークの記録映像。

撮影・編集：嶋津穂高

［鳥海山麓 野生めぐり］

赤石のアマハゲ、小滝のアマノハギ

石倉 敏明

1月13日。午前中に上郷の小正月（横岡のサエノカミ行事）を再訪し、小屋焼きの状況を見て歩いた。その後、赤石地区に継承されているアマハゲの習俗を調査し、集落のどんど焼き、子どもたちの装束付け、そしてアマハゲの来訪による小正月行事に立ち会う。赤石のどんど焼きでは、「男石」「女石」と呼ばれる男女の性器を象徴する石を重ね合わせて焼く。古いお札や門松などと一緒にこれらの石を焼くことで、集落の子孫繁栄を祝う生殖力信仰の文脈が、はっきりと炙り出される。これはまた、近隣の小屋焼きなどで男女のシンボルとともに藁を焼く、性的な豊穣を祝う習俗とも通底するシンボリズムを示しているのだろう。また、象潟町の横岡や大森の小正月行事と同様、ここでも、どんど焼きで焼いた餅を食べると風邪をひかない、一年間息災でいられる、という言い伝えがある。赤石でも餅を焼く参加者がいた。

集会所に移動して、子どもたちの装束付けに移行する。赤石のアマハゲは他の来訪神行事のように顔に仮面を被ることなく、顔を墨で塗ることで仮装する。子どもたちは、体にはケラという藁製の外套を身に付け、真っ黒い顔でアマハゲに変身する。この大役を担うのは、二人の中学生だ。アマハゲになることは、子どもたちにとって特別な経験であるようだ。それは自身が精霊となって集落の民家を訪ね、それぞれの家族単位での小正月を祝う来訪神になるということでもある。

アマハゲに扮した二人の男子は、お付きの子どもたちが奏でる太鼓と鉦のリズムに合わせて「アマハゲ来たじゃ、銭だら五文、酒なら一升」と唄い、民家を訪ねる。大抵の家では、玄関先や屋内の仏壇の前に招かれ、そこでお付きのものたちが太鼓と鉦を鳴らし続けながら「アーッ」と声をあげると、15回飛び跳ねた後にくるっと反対側を振り向き、振り返らずに次の家に向かう。そこには、子どもを脅すわけでもなく、演劇的に家の主人と対話するのでもない、とてもシンプルで生々しい神聖さが発露していた。

夜は小滝のアマノハギを見学した。夕方、小滝の集会所を訪れると、すでに集落の青年たちが集まり神事を始めていた。この祭りを担うのは中世の山伏神楽の系統を汲む鳥海山小滝番楽の保存会に付属する「アマノハギ部会」であり、実際にこの祭りで使用される面も、小滝番楽で鬼面として使用されているものだという。行事の前に尾頭付きの魚と一緒に祀られている面の前で神事が行われることから、この祭事が鳥海山信仰の大きな広がりの中に位置していることがわかる。

近くの横岡地区にはサエノカミ行事という小正月行事と横岡番楽があるように、小滝には鳥海山小滝番楽とアマノハギが継承されている。小滝ではさらに、チョウクライロ舞という古い舞楽が継承されており、全ての行事が小滝集落、金峰神社氏子総代会、舞楽保存会という伝統的な系譜の中で執り行われている。近年は小滝集落ばかりではなく、象潟など離れた場所からも来てほしいという要望があり、集落を回る前に出張してこの行事を行っているという。

象潟から戻ると先導役と一緒に二人の青年が面をつけて、家々を順に訪ねてゆく。神妙な顔でアマノハギを迎える小学校高学年の子どもたち、恐ろしくて泣き叫ぶ低学年の子どもたちなど、家によって迎える態度はさまざまである。昨年見学した石名坂のアマノハギ同様、小滝の面も恐ろしい形相で、実際、アマノハギを経験したことのある現在の大人たちにとっても、いまだに恐ろしいもの、夜道で出会うとおっかなく感じるもの、であるという。

翌朝は象潟町長岡の熊野神社で正月行事の神事に参列した後、横岡大森のサエノカミを訪ね、小屋焼きの様子を見学した。同日午後には秋田市文化創造館で開催された写真家・石川直樹氏と美術評論家・伊藤俊治氏の対談に参加し、二人が継続的に調査している来訪神行事の芸術学的構造の話を聞いた。本調査とも響き合うところが多く、今後小正月行事の構造を、民俗学や人類学のみならずアーティストや写真家の視点で読み解いてゆく可能性を感じた。

「流れ山カード」設置のお知らせ！

井上宗則率いる『流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究』では、「流れ山」を広く知ってもらうために秋田公立美術大学の学生が中心となって「流れ山カード」を試行的に作成しています。これまで、平沢地区と金浦地区の「流れ山カード」を作成しました。「さんねん山」（標高17.1m）、「八幡様」（標高16.4m）、「潮見山」（標高12m）、日和山（標高9.5m）などのカードは、にかほ市役所企画調整部総合政策課、にかほ市観光拠点センター「にかほっと」、caffe ふらっと（にかほ市金浦）などに設置（2024年3月現在）していますので、ぜひお手にとってご覧ください。カードを設置していただける方は、アーツセンターあきた（担当：田村、伊藤）、あるいは、にかほ市企画調整部総合政策課にぜひご連絡ください！

秋田公立美術大学卒業・修了展2024

流れ山とアクティビティの対話

鳥海山の山体崩壊が生み出した「流れ山」の地形に注目し、にかほ市における「流れ山」と「暮らし」の繋がりを考えた町の設計を試みたのが加藤人識（2024年景観デザイン専攻卒）の《dia_logos- 地形・流れ山とアクティビティの対話による随意的空間の創造 -》です。「流れ山の地形と人の振る舞いの繋がりを見つけて、新しいまちの風景を作ることを考えている」と語る加藤は、区画整理で異物と認識される「流れ山」が従来の都市計画に誤動作を呼び起こし、仁賀保地区に暮らす人々が能動的に活動できる空間を提案しました。

加藤人識《dia_logos-地形・流れ山とアクティビティの対話による随意的空間の創造-》
使用素材：スチレンボード、電線、紙、アクリル板、発泡スチロール　サイズ：模型1080×740×100mm、平面模型1100×700mm、ボード5500×1200mm

にかほ市×秋田公立美術大学協働プロジェクト「ジオカルチャー研究プロジェクト」「にかほでそとね」萩原健一 嶋津穂高 櫻井隆平 大平真子 青木邦仁 中田日菜子 岩城佑実 佐藤若奈 「流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究」井上宗則 石田駿太 石戸凛 友杉悠葉 長谷川由美 山下暁羽 吉田美菜 和田瑞生 「野生めぐり にかほ版」石倉敏明 田附勝 大東忍 鈴木望美　コーディネーター｜田村剛 伊藤あさみ（NPO法人アーツセンターあきた）

「ジオカルチャー研究プロジェクト」研究レポート《手長足長》Vol.04　2024年3月発行　デザイン｜上野ゆきこ　編集｜高橋ともみ　撮影｜嶋津穂高 伊藤靖史 石倉敏明 萩原健一 大東忍 ほか　表紙｜尾花賢一　企画｜公立大学法人秋田公立美術大学　制作｜NPO法人アーツセンターあきた　印刷・製本｜秋田活版印刷株式会社　発行｜にかほ市　〒018-0192 秋田県にかほ市象潟町字浜ノ田1番地　※本紙は、にかほ市×秋田公立美術大学協働プロジェクト「ジオカルチャー研究プロジェクト」の一部として作成しています。 ※ジオカルチャー研究プロジェクトに関するお問い合わせ　NPO法人アーツセンターあきた TEL.018-888-8137
※本紙の無断複写・複製・引用を禁じます。